



## 日本分析化学会への発展に向けて

中 村 洋

明けましておめでとうございます。会員の皆様方におかれましては、<sup>すがすが</sup>清々しい新年をお迎えのこととお慶<sup>よろこ</sup>び申し上げます。紙面をお借りして年頭のご挨拶をさせていただきます。

まず、会員の皆様に事務局長の交代をご報告致します。木村宗明さんが昨年末で勇退され、本年から阿部健一さんが事務局長に就任されました。阿部さんは大学卒業後、直ちに本会に就職され、編集畑で修行を積まれた後、最近<sup>あいな</sup>は総務課長としてご活躍でした。阿部さんには、本会事務局の<sup>かなめ</sup>要として大いに期待致しております。木村前事務局長には、小野昭敏さんの後任として5年前に事務局長に就任されて以来、大変お世話になりましたが、なお今年の春までは常務理事としての要職を<sup>いた</sup>た<sup>だ</sup>継続して戴<sup>か</sup>けます。

さて、本会の発展には様々な観点からのグローバル化が重要ですが、昨年は本会の国際英文誌「Analytical Sciences」のインパクトファクターが1.735に上昇したという明るいニュースに接しました。この数字は総説誌を除く国内化学系専門誌では最も高いものです。歴代編集委員会の先生方・担当事務職員のご努力に改めて感謝の意を表します。私も2代目の編集委員長をされた黒田六郎先生の下で編集理事を務め、「Instrumental Achievements」欄の中に「X-Ray Analysis」コーナーを創設して、企業に埋もれているX線構造解析の結果を収載する企画に携わりました。この企画は投稿論文を集める方策の一つでありましたが、幸いにもX線関係の論文は年々増加し、昨年1月よりは独立して電子ジャーナル「X-ray Structure Analysis Online」の発刊に漕ぎ着けたことは、英文誌の発展を象徴する出来事として感慨深いものがあります。昨年8月、マレーシアの首都クアラルンプールで第10回アジア分析科学会議（ASIANALYSIS X）が開催された折、本会はアジア地区における分析化学の研究教育の振興を目的として、アジア分析化学ネットワーク（AACN）の構築を国際諮問委員会に提案し承認されました。そこで、東アジアの10か国から各1名の分析化学者を招待し、第1回目のシンポジウムを第58年会（北海道大学）の最終日に開催し成功裏に終わりました。AACNは15,000名程度の研究者・技術者の登録を目指しておりますので、会員の皆様にも本会のホームページをご覧の上、本ネットワークへの登録をお願いする次第です。行く行くは、アジア地区での分析化学オリンピックの開催へと発展させたいものです。また、ご承知のように来年5月には本会の60周年を記念してICAS 2011を京都で開催します。奮ってご参加下さるよう、お願い致します。

ところで、本会の財政は経済不況に伴う広告収入の減少と会員数の減少<sup>あいま</sup>が相俟って数年来赤字です。本部事業費を削減し節約に努める一方、本部・支部会計の一本化、支部配分費の減額、聖域である職員給与の値下げ・賞与の削減も視野に入れた、新企画としての「企業特集」による広告収入の安定確保、収益性の高い標準物質作製の再開、資格認証制度の導入などの各種増収策に智恵を絞っております。会員の皆様には、「貧すれば鈍する」ことにならぬよう、都道府県単位での活動（1月8日、岐阜県分析化学交流会；1月22日、千葉県分析化学交流会）・人生談話会などを通じて、本会の活性化と会員拡充にご尽力下さいますよう、切にお願い申し上げます。今年は西暦年を60で割って30余りますので<sup>こういん</sup>庚寅に当たり、陰陽五行では相剋の年です。本会の再建・発展には、本部・支部の相互理解と協力がもとより不可欠であることを申し上げて新年のご挨拶とさせていただきます。（2009年11月15日記）

[Hiroshi NAKAMURA, 東京理科大学薬学部, 日本分析化学会会長]